

Contact Zone 2013 書評

門田岳久著

『巡礼ツーリズムの民族誌 ——消費される宗教経験』

森話社、2013年、5,600円＋税、393頁

河西瑛里子

はじめに

「巡礼ツーリズム」

何だかしっくりこない言葉だ。苦行する「巡礼」でもない。レジャーする「ツーリズム」でもない。もちろん、「巡礼とツーリズム」としたかったのに、「と」を書き忘れたわけでもない。この腑に落ちない違和感はどこからくるのだろう。

それはおそらく、「聖なる宗教」と「俗なる商業主義」という、正反対の領域にある言葉が、ぺたりと合わさっている造語だからではないだろうか。こうした、意味的に対立する言葉を1つに結びつける用法は、「交叉語法（キアスム＝絡み合い）」と呼ばれるらしい（pp.28-29）。

この聞き慣れない言葉をタイトルとするのが、本書『巡礼ツーリズムの民族誌』である。そこでは、誰もが薄々気づいてはいたものの、真っ向から主題にすることがあえて忌避されてきた宗教と消費社会の絡み合いが、正面切って論じられている。宗教と消費を分け隔てせず、渾然一体のものとして取り扱おうとする著者の一貫したスタンスは、潔いほど心地よい。

以下では、本書の概要を紹介し、その後いくつかコメントをしていく。

本書の概要

本書は、現代の日本をフィールドとする、文化人類学者・民俗学者である著者が、2011年に東京大学大学院総合文化研究科に提出した博士論文が土台となっている。巡礼ツアーの経験者や巡礼ツアー専門の旅行業者を主な対象に、丹念に実施されたフィールドワークは2002年～2010年の足掛け8年にわたっており、その足を伸ばした範囲も佐渡と四国を中心に、沖縄や北海道にまで及んでいる（pp.40-42）。

前もって構成について1つ述べておくと、各章は単独の論文のように独立性が高いため、どの章から読み始めてもかなりの知見を得られる。逆に初めから順に読み通していくと、登場する概念や理論の多さにやや戸惑ってしまうかもしれない。しかし、著者による

213

丁寧な解説と優れた構成力が理解を後押ししてくれるだろう。

全体は序論、国際機関や国家というマクロなレベルで論じる第Ⅰ部、ややスコープを絞って企業や地域社会を対象とする第Ⅱ部、さらにミクロなレベルとして個人を扱う第Ⅲ部、結論と分かれている。章立ては以下の通りである。

第1章 宗教・ツーリズム・再帰性 宗教的経験のエスノグラフィーに向けて

第Ⅰ部 資源化される宗教

第2章 信仰の「価値」 聖地をめぐる資源化の力学

第3章 巡礼ツーリズムの誕生 宗教と観光の日本近代

第4章 巡礼ツアーのエスノグラフィー

二つの〈絡み合い〉が生み出す間身体的共同経験

第Ⅱ部 日常的宗教環境の再構築

第5章 宗教観光業の地域民族誌／経営史 佐渡における宗教的環境の再編

第6章 日常における宗教的实践の消長 擬似巡礼儀礼の衰退と演出をめぐって

第Ⅲ部 個の経験からまなざす

第7章 巡礼経験者の生活史と自己物語 対話されるリアリティーをめぐって

第8章 日常的秩序と超常現象の生態学 ナラティブ・憑依・巡礼経験

第9章 「経験消費」の設計思想 旅を通じた〈自己〉の形成に関する批判的考察

第10章 結論

第1章の冒頭で、著者は本書の2つの目的を掲げている (p.9)。1、「宗教的なもの」の現代的位相を文化人類学・民俗学的な宗教研究の文脈に位置付けること。2、商品化された宗教が人々にいかに経験されているのか、参与観察や聞き取り調査をもとにして明らかにすること。その後、これらを可能にする理論的背景として、現代日本の宗教、宗教という概念、消費社会と宗教、「宗教とツーリズム」研究、観光人類学、民俗学、再帰性という7点が議論される。

続く第2章は、2000年にユネスコの世界遺産に認定された琉球王国のグスク及び関連遺産群の1つ、^{セーふあ う たき}斎場御嶽が舞台である。沖縄本島南部に位置するこの聖地は、琉球の創世神話や琉球王朝との関わりが深く、現在でも「沖縄最高の聖地」として広く認識されており、^{あがりう まーい}東御廻りと呼ばれる巡礼やユタなどの宗教者による拝みが行われている。世界遺産になる過程で価値が認められたのは、東御廻りを代表とする琉球王国の王室祭祀に由来するとされる信仰であり、宗教者の拝みといった個人的／民間の信仰は周辺化されていった。いうまでもなくこの判断はローカルな人々に関わることはできない外部の国際機関によってなされた。このように、現代では宗教関連の諸概念の価値は、人々の生活世界から離れたところで、政治的・経済的に強い力をもつ外部の機関によって規定されていく。そこから提示されるのは、市場において資源化されていく現代の宗教の姿である。

第3章では、第2章で示された宗教を資源化していく主体としてツーリズム産業が取り上げられ、近代の日本における巡礼ツーリズム誕生の歴史が明かされる。日本の巡礼ツー

リズムは、宗教組織ではなく、旅行業者や鉄道会社といった産業セクターが主導して生まれた、新しい旅行商品であり、多くの巡礼研究が指摘するように、個々人が直接、巡礼空間にアクセスしていたわけではない。現在見られる巡礼ツーリズムの先駆けとなったのは、戦後に登場した 88 ヶ所の霊場で知られる四国遍路をバスでめぐる団体ツアーである。これは、宿や交通手段の手配といった通常の旅行業務に加えて、添乗員が参加者に巡礼の作法や知識を伝達するなどの、宗教者の役割も果たしている点が特徴的だった。宗教と観光が接合していき、形成された巡礼ツーリズムという領域は、まさに本誌の誌名にある「コンタクト・ゾーン」なのである。

第 4 章は、いよいよこの巡礼ツーリズムの現場のエスノグラフィーである。観光業的な業務と宗教性の絡み合いが、参加者にいかなる「経験」をさせているのかが明らかになる。その鍵は、巡礼ツアーに満ち溢れている観光的な要素を、いかに表に出さないようにするかだといえる。旅行業者は、参加者を精神的に満足させるために 2 つの仕掛けを用いる。1 つ目はツアーの最中は宗教的文脈に沿った言葉を使うよう、言葉遣いを指導していくことである。2 つ目は読経を通じた身体経験である。ツアー開始時には息が合わない唱和も、終盤には参加者全員のリズムがぴたりと合うまでに上達していく。このとき、読経は単なる言語行為を超えた一種の身体的行為となり、参加者は他者との間に身体が溶け合っていくような感覚をおぼえる。他者との間に生まれる、この間身体性が共同経験を創り出すのである。巡礼ツーリズムとは、主として自己の内面的な充足を図る内向きな実践である。その一方で、この事例からは他者と一時的につながることによって生じる共同性も求められていることがわかる。従来、ツーリズムのような経験に価値がおかれる商品は、自分にとっての価値が重視され、他者との関係構築には向かわないと指摘されてきた。しかしこの指摘は、巡礼ツーリズムにはあてはまらないのである。

巡礼ツアーという非日常に焦点を当てた第 4 章に対して、第 5 章と第 6 章で描き出されるのは、そのようなツアーに参加する人々の日常である。新潟の佐渡にある小さな観光業者 S 社を中心に、佐渡におけるツーリズム産業の歴史（第 5 章）と現在（第 6 章）がフィールドワークに基づいて提示される。この作業を通じて、宗教と観光の相補的な関係が示されていく。

佐渡では、巡礼旅行を代替する仕組みとして、島内に四国遍路を「写した」小規模の巡礼地や巡礼和歌を唱和する擬似巡礼の儀礼が 19 世紀には整備されていて、当時から四国巡礼への関心が高かったことが伺える。その一方で、四国への巡礼が一般の人々にも手が届くようになったのは、日常生活の中に埋め込まれていた巡礼習俗が、産業セクターによって取り出され、扱いやすい商品となった 1970 年代以降であった。佐渡を拠点に巡礼ツアーを行っている S 社は、佐渡に巡礼ツーリズムを根づかせていった立役者である。創業者は島民を対象にした既存の聖地への巡礼ツアーを行うだけでなく、寂れていた島内の巡礼地を再編し、外から人を呼び込むための「佐渡新四国霊場」として商品化していった。彼は企業家であるとともに信仰心の篤い人物だったので、一連の事業を通して、信仰の活性化も目指していた。しかし、寺院などの宗教組織の出身ではないのに巡礼習俗の領域に参入したという外部性が、一部の住人の間に S 社への抵抗感を生み出し、その結果

「商業的」という批判を受けるようになった。

第6章では、佐渡におけるS社等の日常的な活動を描くことで、宗教やツーリズムの日常性が考察される。S社のツアーに参加した人々は、ツアー終了後もゆるやかな共同性を保っている。その共同性を支えているのが、人間関係構築の場としての意味合いが強い、読経の練習会である。本章ではもう1つ、S社とは関わりのない同様の集まりの事例が示される。それは四国巡礼をきっかけとして、ある夫婦が復興させた擬似巡礼の儀礼である。このように巡礼ツーリズムによって生活世界から取り出され、商品となった宗教習俗を、巡礼ツーリズムの経験者が日常生活の中に再び埋め込んでいるのである。巡礼ツーリズムが宗教習俗を日常生活から取り出すと同時に再び埋め込んでいるという相補的な状況は、巡礼ツーリズムが「共同性」や「社会的文脈」を構造化し、個人をそこに規定する可能性をもつことを示唆している。そのとき、個人が自由で主体的に宗教的表象を選択しているという宗教の私事化論は成り立たないと、著者は指摘する。

第7章と第8章では、さらにスコープをミクロなレベルに絞って、個人の経験談が取り上げられている。第7章では、ある女性巡礼ツーリズム経験者との対話における語りの分析を通じて、信心の形成過程と語るという行為の意味が論じられる。紹介される対話はいずれも佐渡に広く流布する、「巡礼は良きもの」というストーリーの範疇に収まるため、彼女の信心は佐渡という社会と関連しながら生成されたことが指摘される。その後に彼女の巡礼に対する意味づけが年月を経て変容していった要因が分析される。著者によると、それは過去の出来事を語る中で、「自己」の物語が組織化されていったためであった。このような宗教的経験の「物語」の形成からは、巡礼ツーリズムが自己物語を想起するうえでのきっかけと解釈の枠組みとなっていることがわかる。

第8章で見ていくのは、第7章で考察された宗教的経験という非日常領域の語りが、日常的な秩序の中で、リアリティーを獲得していく過程である。かつて佐渡では、体調不良や幻視・幻聴、人格変容といった、日常生活の中で遭遇する不思議な出来事は、タヌキに似た「トンチボ」という動物の憑依と結びつけて説明されていた。しかし、動物憑依の言説は今では迷信と片付けられている。その一方で、巡礼ツーリズムが盛んになりつつある現在、体調の変容や幻視が巡礼中の不思議体験として語られる。こういった超常現象がリアルな体験として他者にも受容されるのは、佐渡では巡礼がこういった体験をする場として認識されているからである。さらに、相手が受け入れやすいよう、語りの構造もパターン化されていく。

動物憑依も巡礼ツーリズムも人々の経験や解釈を作り出す「装置」として捉えれば、両者はこの地域の人々に、不可解な状況を理解させるために不可欠な体系であった。このような体系は、常識では信じがたい超常現象の理解に、それ以上頭を悩ませない、つまり判断を停止させるという側面をもっていたといえる。動物憑依が担っていた超常現象を説明する装置としての役割が巡礼ツーリズムに移行したことは、日常生活の中から旧来的な意味での宗教が失われたように見えても、概念の範囲を広げてみれば、旧来の宗教の役割を代替している何らかの機能を見つけられることを示唆している。

第9章では、旅する行為が自己アイデンティティの確立に寄与するという論調が批判的

に検証される。現代はあらゆる事柄が商品化された消費社会であり、たとえバックパッカーであっても、旅先でツーリズム産業が提供する「冒険」を選択しているにすぎない。そのため、主体的な選択の可能性、ひいては自己アイデンティティの確立の可能性に、著者は疑問を呈するのである。その後、未だに宗教にロマン主義を見出そうとする宗教研究の姿勢が批判される。現地調査から収集される語りや観察される実践を無批判に肯定することは、インフォーマントの主体性や自由意志を過剰に評価してしまい、結果としてその背後に潜む消費社会がもつ権力性を肯定してしまいかねない。それは、宗教が世俗化されつつある実情に目をつぶり、逆にロマン主義的な称揚につながると批判するのである。

第10章では各章のまとめに続いて、宗教を研究する際には本書のように個の経験—地域社会—宗教ツーリズム市場という異なるレベルを同時に取り扱い、それぞれが相補的に形成されていることに留意する必要があると指摘される。そして最後に「浅い」経験について考察される。巡礼ツーリストたちは、それほど大変な思いをせず、ほどほどに満足できるような「それなりの宗教経験」をツアーに求める。そこで得る経験は、当人にとっては自己を問い直す契機と認識されているものの、宗教的な深みにはまらないという意味において「浅い」。しかし著者は終わりが無い自己省察を早めに切り上げてしまう点で健全だと、積極的に評価する。「浅さ」に現代における思想的な可能性が見出されるのである。

巡礼ツーリストの民族誌

本書の主たる考察対象である団体ツアー客というのは、私たちもよく目にする集団ではある。しかし、単独での行動を好みがちな文化人類学者には、いわゆる「身近な他者」ではないだろうか。彼ら巡礼ツーリストたちについての民族誌的記述が何といても本書の一番の魅力である。佐渡での彼らの日常に迫る記述も面白いが、民族誌としてのハイライトは、やはり第4章で描かれる、大型観光バスの車内および行く先々で繰り広げられる、参加者たちのエスノグラフィーだ。特に面白いのは、添乗員補佐として同行した若い著者と年配の参加者との微笑ましい交流の場面である。巡礼ツアーには珍しい若者である著者のところには、休憩中に購入された菓子の類が次々とまわされ、食事のときにはカツ丼が3杯並んだこともあったらしい (p.142)。このように、調査対象である「おばちゃん」や「おじちゃん」から著者が可愛がられていた様子が行間からよく伝わってくる。

私は常々、民族誌には2通りの読み方が可能だと思ってきた。1つは、主に専門の研究者だけが理解できる理論的なパートも含めての丹念な読解。そこでは笑いより、読者を思わず唸らせるような理論的展開が求められる。そしてもう1つは、「難しい」部分は読み飛ばし、事例だけを拾い読みしていく、楽しい読み物としての読み方だ。前者としては十分でも、後者の役割を欠く民族誌も少なくない中、本書はそのバランスがよくとれている。

ネイティブ人類学

著者の国籍と調査地がともに日本なので、本研究はネイティブ人類学にも分類される。その意義の1つは、「日本」という国単位で分析を進めるのではなく、国内の多様性に目を配りながら、それぞれの文脈での丁寧な分析の重要性を認識しやすいことだと思う。著者自身、第1章で「そもそも同じ国家に生きているからと言うだけで、普段生活を共にするわけでもない人々のことが自明のように「わかる」と言いきれほど、我々「日本人」の同質性が高いとは言い難い」(p.39)と述べていて、このことに十分意識的である。

それだけに、第2章で沖縄が事例として出てくるのは、少し唐突な印象を受ける。もちろん、世界遺産というのはグローバルなレベルでの政策なので、一般化しうるかもしれない。しかし、日本という国家の中で沖縄が特異な位置に置かれてきたことを考えると、四国巡礼と関連している他の章の事例と同じように、考察の対象として捉えられるのか、少し気になった。

共同体験とコミュニティ

第4章では、読経によって参加者たちが得ているとされる、間身体的な共同体験について論じられている。著者は、「巡礼といわれる儀礼的实践が、「非日常的」な秩序に支配された時空間であり、新たな社会的地位を獲得するための移行期間であるという古い人類学理論」(p.132)を肯定しつつも、「自己の刷新される根拠が、かつてV・ターナーが述べたように反構造的な場に身を置くことかという疑問は残る」(p.132)という。そして現代の歩き遍路の場合、歩くことで生じる身体の<痛み>の経験にこそ、刷新の根拠があるのではないかと指摘する。ここまではわかる。しかしその後示される、できるだけ身体に負担をかけずに巡礼しようとする巡礼ツーリストたちが心地よく感じてしまうという、読経を通じた間身体的な共同体験というのは、むしろコミュニティそのものではないのだろうか。著者はこの点について、特に触れていないので、一度聞いてみたかった。

超常現象の分析

著者は超常現象を説明する装置が、動物憑依から巡礼ツーリズムに代わったとしている。しかし、事例を読む限り、動物憑依は今では精神疾患に分類されるような、当事者にとって望ましくない状況を引き起こしてきた一方で、巡礼ツーリズムは心の安寧といった望ましい状況をもたらしている。同じ「超常現象」とはいっても、当人の身に起こる出来事は正反対なのである。それにもかかわらず、巡礼ツーリズムは動物憑依の代替機能を果たしているといえるのだろうか。

著者も触れているように、近年日本では、「心療内科」を標榜するクリニックが増えるなど、かつては人知の及ぶところではないとされ、宗教の領域で理解されてきた出来事の多くが、精神医学の領域で解釈されるようになってきている(p.262)。その一方で、安らぎや癒しといったセラピー的な要素は、未だ現代医学の支配を受けるに至ってはいない。そう考えると、動物憑依に代わる、現代の説明体系とは精神医学であり、巡礼ツーリズムは安らぎや癒しを担っていた生活世界に埋め込まれていた他の習俗を代替している可能性

もある。

もう1つ、超常現象に関する語りの信憑性についても疑問を呈したい。著者は、超常現象は存在していて、それを説明するための装置として動物憑依や巡礼ツーリズムが駆動していると分析する。しかし逆に、この地域に超常現象の物語が流通しているから、それに遭遇したと思いたい島民が、見方によっては超常的とも捉えられる体験を、超常現象を説明するプロットに落とし込んで説明していた可能性も捨てきれない。また体調の変容や幻視・幻聴といった「超常現象」は気持ちや意識次第では、コントロールできうるものであり、本人が無意識のうちに「超常的」な体験を引き起こしていなかったとは言いきれないのではないだろうか。

おわりに

「キアスム」と語源を同じくする単語に「キアズマ」がある。卵や精子が形成される減数分裂に際して、相同した染色体が絡まりあう現象を指す生物学の用語である。交差は染色体にバリエーションを創り出し、そこから種の多様性が生まれる。本書は、キアズマのように、新しい可能性を秘めた概念である「巡礼ツーリズム」というキアスムについての理解を、とてもよく深めてくれる。読み終えたとき、あなたの頭の中の辞書をちょっと確認してみしてほしい。そこにはきっと、「巡礼ツーリズム」という言葉が、何食わぬ顔で加わっているだろうから。

付記：なお、本著には、岡本亮輔氏（『宗教研究』第87巻第2輯（377号）、193（441）-199（447）頁、2013年）や開沼博氏（2013年4月28日読売新聞）による書評もある。特に前者は本書の宗教学的な側面を鋭く評しており、一読の価値がある。